

# 菩薩の靈驗譚と要文の集成

——金剛寺藏〈佚名諸菩薩感應抄〉の方法——

箕 浦 尚 美

はじめに

大阪府河内長野市の真言宗の古刹天野山金剛寺に蔵される〈佚名諸菩薩感應抄〉(仮題)(金剛寺聖教第一七函四八九番)は、菩薩に関する経文と感應譚を抄出集成した平安時代末期書写(書写識語なし)の列帖装の冊子である。本書は、後藤昭雄氏による一連の研究<sup>[1]</sup>によって、中国の『觀世音菩薩感應記』、『三宝感應要略録』、『大唐西域記』、日本の『日本靈異記』、『法華驗記』、『善家秘記』などの佚文を含む多数の文献の引用が指摘され、説話文学研究に寄与する貴重な資料として注目されてきた。特に、六朝時代の觀音信仰を伝える『觀世音菩薩感應記』の本文を多く含む点は、国際的にも注目されている(『觀世音菩薩感應記』は京都青蓮院藏平安末期写本のみが残る)。しかし、これまでの研究で着目されてきたのは主にその感應譚の部分であり、感應譚の前にある経文集成部分の検討は十分

にはなされていない。本書編纂の重要な典拠である『観世音菩薩応驗記』や『三宝感応要略録』も感応説話集であるが、関連経文の集成はなく、本書は、靈驗をもたらす菩薩への信仰を、日本において経文とともに綴った比較的初期の類書とも言える。そこで、本稿では、同書の経文集成部分（特に引用の多い観音菩薩部）を中心に、出典を確認し、その内容や編纂方法を検討する。また、経文集成部分にも感応部と同様に伝存の少ない本文を収録している点を指摘する。

なお、〈佚名諸菩薩感応抄〉の全文は、『天野山金剛寺善本叢刊』第二期第四卷（後藤昭雄監修、勉誠出版）において筆者が翻刻紹介する予定である。

## 一、〈佚名諸菩薩感応抄〉の構成

〈佚名諸菩薩感応抄〉は、列帖装で七括から成り一一〇丁が現存するが、末尾は欠落している。冒頭も欠けている可能性がある。<sup>②</sup>すべて引用文から成り、標題に類するものが各部分の前に以下のようにある。

「菩薩<sup>①</sup>」「菩薩名義」「文殊」「感応」「普賢」「観音」「感応」依文少付勢至」

「菩薩」は二二六、「菩薩名義」は三〇の引用経文から成る。<sup>①</sup>それらによって菩薩の概要を述べた後、文殊菩薩、普賢菩薩、観音菩薩の順に、各菩薩にかかわる経文が列挙され、その後、各々の菩薩の感応譚が収録されている。便宜上、本稿ではこれを、「文殊篇 経文類聚部」「文殊篇 感応部」のように呼ぶこととする。文殊篇には経文が四

四件、感応譚が一九話、引用されている。丁数は計三〇丁分である。その他、各部分の量と割合は、【表】を参照されたい。全体の半分近くが観音篇である。

各篇はいずれも丁の表側から書き始められているが、【表】に示したように、篇の末尾に一丁以上の大きな余白を取る場合がある。観音篇では、途中にも内容的区切り目に複数の余白があるが、大きな余白は、そこに要文や感応譚を追記するために設けたものと推測される。空行は計一五三行あるが、本文は半丁に八行ずつ書かれていることから、本書全体に九丁半の余白があることとなる。実際に筆を替えて書き加えた跡は見られないものの、加筆できる余白がある点は本書の性質を示すものとして捉えておきたい。

文殊・普賢・観音・(依文少付勢至) という配列については、釈迦の脇侍である文殊と普賢、阿弥陀の脇侍である観音と勢至という順序かと思われる。しかし、この順で編纂されている書物は少なく、遼の非濁撰『三宝感応要略録』が同じ順序である

【表】

内 容	引用数	丁数	文末の空行数
(白紙、表紙か)		1丁	
菩薩	26	6丁	10行(半丁+2行)
菩薩名義	30	6丁	17行(1丁+1行)
文殊篇経文類聚部	44	11丁	17行(1丁+1行)
文珠篇感応部	19	19丁	27行(1丁半+3行)
普賢篇経文類聚部	20	5丁	10行(半丁+2行)
普賢篇感応部	11	9丁	27行(1丁半+3行)
観音篇経文類聚部	68	16丁	15行(半丁+7行)。途中に10行(半丁+2行)の空行あり。
観音篇感応部(尾欠)	61	37丁	0行。途中に20行(6行、6行+半丁)の空行あり。
合 計		110丁	123行。途中30行。

ことから、その影響とも考えられる。『三宝感応要略録』には、三宝、すなわち仏宝・法宝・僧宝に関する感応譚が収録されており、菩薩の感応は、巻下の僧宝に、文殊菩薩（1〜6）、普賢菩薩（7〜10）、弥勒菩薩（11〜14）、観音菩薩（15〜30）、勢至菩薩（31）、地藏菩薩（32〜35）（以下略）の順にある。〈諸菩薩感応抄〉には、文殊篇感応部の冒頭に五話、普賢篇感応部の冒頭に四話の引用があり、同書は主要な依拠文献である。ただし、観音篇感応部は同書ではなく主に『観世音菩薩験記』を利用している。また、〈諸菩薩感応抄〉の勢至菩薩篇は観音篇感応部の標題に「依文少付勢至」とあるのみ（本書末尾は欠落）だが、『三宝感応要略録』も標題としては一話のみの収録であり、勢至菩薩の話は多くは集められなかったのかもしれない。

以下、各菩薩篇の引用書を検討する。

## 二、文殊篇

### （1）文殊篇経文類聚部

文殊篇の経文類聚部には、四四の経文が引用されている。引用の末尾は、「文」の字で閉じられ、その後には簡単な出典注記がある。本文の順に番号を付して示すと以下の通りである。なお、書名の分かりにくいものや、注記と異なる経典が引用されている場合には、それを（ ）内に示した。

- 1 心地觀經、2 寶積經（大方廣寶篋經）、3 同（大方廣寶篋經）、4 同、5 普超經（文殊支利普超三昧經）、6 大淨法門經、7 央掘經（央掘魔羅經）、8 寶積經、9 同、10 同、11 同、12 同、13 五字陀羅尼頌、14 同、15 一切如來同一密合為文殊（金剛頂瑜伽中略出念誦經）、16 心地觀經、17 普超經、18 同、19 華嚴經、20 寶積經、21 文殊涅槃經、22（文殊師利發願經）、23（文殊師利發願經）、24 已上文殊發願經、25 寶積經、26 寶積經、27 法華經、28 文殊涅槃經、29 文殊師利寶藏陀羅尼經、30 同、31 同、32 同、33 同、34 同、35 寶積經
- 36 涅槃經：「十方世界中 有仏無仏国 大乘所流演 皆是文殊力」とあるが、涅槃經にはない。『溪嵐拾葉集』には、「故経云」として同文が引用されている（『大正蔵』七六、八三八頁中段）。類似したものは、『文殊師利寶藏陀羅尼經』に「一切諸世界 有仏国土処 大乘所流布 皆是文殊力」とある。静然撰『行林抄』などにも見られる。
- 37 金剛頂經：「文殊是一切如來般若之藏之法藏也」とあるが金剛頂經にはない。取意か。
- 38 法昭：『新修往生伝』卷三釈法照から引用か。
- 39 元通：『三宝感応要略録』卷下「第六 五台县張元通造文殊形像感応」から引用か。
- 40 慈恩引経：『広清涼伝』卷一「又大慈恩寺基法師阿弥陀経疏。引経云。」から引用か。
- 41 花嚴経：花嚴経の文だが、『広清涼伝』にもあり。
- 42 同：花嚴経の文だが、『広清涼伝』にもあり。
- 43 化僧語道義之文：『広清涼伝』の「大聖僧謂義曰」によるか。
- 44 普通：安然撰『普通授菩薩戒広釈』

1、35については、2で「宝篋經」を「宝積經」に誤る以外、出典注記との齟齬はないが、36以降が興味深い。36は、出典を「涅槃經」に誤っただけでも捉えられるが、そのように書かれた資料からの孫引きの可能性もある。37「金剛頂經」は、経意を取って纏めたか。38、39、40は、『新修往生伝』『三宝感応要略録』『広清涼伝』などの伝記や感応譚に含まれる偈頌に依っている。経文の集成が感応譚と深く関わるものであることを示している。41、42は、『華嚴經』の語句であるが、前後の40、43が『広清涼伝』によるものであることから、41、42も『広清涼伝』からの孫引きの可能性がある。清涼山(五台山)は文殊信仰の聖地であり、『広清涼伝』には文殊菩薩の靈驗譚が多数収録されている。44は平安期の天台僧安然の著作からの引用である。

## (2) 文殊篇感応部

文殊篇感応部の一九話のうち、1、5の出典は、『三宝感応要略録』である。1、4は「感応録」として引用され、5は「新録」として引用されているが、「新録」は、『三宝感応要略録』の標題に記されている注記と同じである。6「文殊他方如来之文」から14「清涼山得名所因」と最後の19「文殊三摩耶之文」は、感応譚ではなく文殊の由来や文殊自身の誓願である。6は「央掘魔羅經」、7は「首楞嚴經」、8、11、12は「宝積經」などとして引用されているが、『広清涼伝』からの孫引きと見られるものも含まれる。例えば、7は、『広清涼伝』巻上に「按首楞嚴經下卷云」(『大正蔵』五一、一一〇一頁中段)として引用される語句に相当するが、『首楞嚴經』には一致しない。また、17「仏陀波利入金剛窟」、18「法昭和尙入化竹林寺」は『広清涼伝』に拠る感応譚である。『広清涼伝』は、

感応部・経文類聚部ともに文殊篇の主要な典拠と言える。

### 三、普賢篇

#### (1) 普賢篇経文類聚部

普賢の経文類聚部の要文二〇件のうち、一四件は『華嚴経』で、普賢三昧品や入法界品などの普賢菩薩について書かれた部分である。出典注記は以下の通りであり、( ) 内は実際の出典である。齟齬はない。

1 花嚴経、2 同、3 華嚴経、4 同、5 仁王 (仁王般若陀羅尼釈)、6 同、7 文殊発願語也 (文殊師利発願経)、8 大般若経、9、14 (華嚴経)、15 已上花嚴入法界品十願文、16 花嚴経、17 法花経、18 花嚴経、19 智論 (大智度論ではなく、妙法蓮華経玄賛からの孫引き)<sup>(5)</sup>、20 法花

#### (2) 普賢篇感応部

普賢菩薩篇の感応部は、『三宝感応要略録』四話、『法華伝記』三話、『大日本国法華経験記』三話、他一話の計一話から成る。他一話とは、末尾に置かれた以下の話である。

書云、昔、伏羲乃王、臨河釣魚、即得一龜、背上有是八卦也、變成六十四卦体、以之為模、尋五性吉凶、一毫

不謬。或経、普賢菩薩自誓云、我作大亀、背負五吉凶、現於世為恒規者。仍可信八卦也。

「書云」「或経」の語を含めて、『注好選』巻下「亀負八卦図 第四十七」とほぼ同文である。『注好選』から本書への引用は他には見られないが、『注好選』にも『觀世音応驗記』を出典とする話があり、資料収集の場は近かつたものと思われる。

#### 四、觀音篇

##### (1) 觀音篇感應部

觀音菩薩篇の感應部も経文類聚部の後に配置されるが、論述の都合上、先に述べておく。詳細は先行研究（後藤昭雄氏論考）を参照されたい。感應部には、六一話が収録されており、以下の文献を出典としている。『觀世音応驗記』三七話、『觀音義疏』二話、『大唐西域記』三話、『日本靈異記』七話、『大日本国法華経驗記』七話、『善家秘記』三話、『法苑珠林』一話、出典未詳一話である。伝存の希少な中国六朝時代撰述の『觀世音応驗記』の本文を多く収めている点が国際的にも注目される所以である。また、日本の三善清行『善家秘記』も散逸書である。『善家秘記』は、本書の三話を含む七話の佚文が知られている。

【観音篇経文類聚部出典一覧】

- \*〈 〉内は本文中の典拠注記である。記載の無いものは「ナシ」と記した。〈 〉の下部に実際の典拠を示した。注記は、主に引用文の末尾に小書きされているが、18、19、50、56は、引用文冒頭の見出し等である。
- 1 〈ナシ〉 仏説大乘莊嚴宝王経（宋 天息災訳）
- 2 〈ナシ〉 同右
- 3 〈ナシ〉 同右
- 4 〈已上大乘莊嚴宝王経〉 同右
- 5 〈弘猛海慧経〉源信撰『往生要集』等所引「弘猛海慧経」
- 6 〈ナシ〉 請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼咒経（東晋 難提訳）
- 7 〈已上請觀音経〉 同右
- 8 〈観音三昧経〉 観世音三昧経（六朝時代撰）
- 9 〈同〉 同右
- 10 〈同〉 同右
- 11 〈ナシ〉 不空羂索神变真言経（唐 菩提流志訳）
- 12 〈ナシ〉 同右
- 13 〈ナシ〉 同右
- 14 〈ナシ〉 同右
- 15 〈ナシ〉 同右
- 16 〈已上不空羂索経〉 同右
- 17 〈同〉 同右（後ろ一〇行空き）
- 18 〈如意輪六臂 瑜伽法面決 金剛智説〉 不明、『覺禪抄』観音部の「六手本誓 或抄云」に近い（後ろ一行空き）
- 19 〈文様 不空訳〉 不空訳の観自在菩薩如意輪瑜伽ではなく金剛智訳に一致
- 20 〈ナシ〉 仏説観自在菩薩如意心陀羅尼咒経（唐 義浄訳）
- 21 〈ナシ〉 同右
- 22 〈ナシ〉 同右
- 23 〈ナシ〉 同右
- 24 〈已上如意輪経〉 同右
- 25 〈如意摩尼陀羅尼経〉 観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経（唐 宝思惟訳）
- 26 〈同〉 同右（後ろ一行空き）
- 27 〈千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経 呪楊枝嚼之得大弁才云々〉 千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経（唐 菩提流志訳）
- 28 〈同経〉 同右
- 29 〈千手千眼観世音菩薩 惣持陀羅尼印 同経〉 同右
- 30 〈菩薩呪経上〉 千臂千眼観世音菩薩咒経（唐 智通訳）  
日本古写経本
- 31 〈千手経 誦陀羅尼四種成就 息災 增益 降伏 敬愛 鈎召 等〉 千手千眼観世音菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼経（唐 伽梵達摩訳）
- 32 〈姥陀羅尼経〉 27に同じ

- 33 〔千臂千眼觀世音菩薩呪經品卷上〕30に同じ
- 34 〔姥陀羅尼經〕27に同じ(後ろ一行空き)
- 35 〔大乘莊嚴寶王經 觀音六字明呪也〕仏説大乘莊嚴寶王經
- 36 〔同經〕同右
- 37 〔同經〕同右
- 38 〔阿嚕力迦經 觀音真言也〕阿喇多羅陀羅尼阿嚕力經(唐 不空訳)
- 39 〔觀無量壽經〕仏説觀無量壽經(宋 疆良耶舎訳)
- 40 〔決定毘尼經 觀音語也〕仏説決定毘尼經(西晋 敦煌三蔵訳)
- 41 〔法花經〕妙法蓮華經(姚秦 鳩摩羅什訳)
- 42 〔觀自在菩薩授記經〕仏説大方広曼殊室利經(別名 觀自在菩薩授記經)(唐 不空訳)
- 43 〔阿嚕力迦經〕38に同じ
- 44 〔悲花經〕妙法蓮華經文句(隋 智顛説)等所引「悲華經」
- 45 〔觀音三昧經〕不明、日本撰述か
- 46 〔玄贊〕妙法蓮華經玄贊(唐 窺基撰)
- 47 〔ナシ〕法華文句記(唐 湛然述)
- 48 〔釈籤〕法華玄義釈籤(唐 湛然述)
- 49 〔止觀〕摩訶止觀(宋 知礼述)
- 50 〔請觀音經四行偈〕請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經(東晋 難提訳)(後ろ一行空き)
- 51 〔陀羅尼集經〕陀羅尼集經(唐 阿地瞿多訳)
- 52 〔ナシ〕十一面神呪心經(唐 玄奘訳)
- 53 〔十一面〕同右
- 54 〔同〕同右
- 55 〔同〕同右
- 56 〔儀軌云〕十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經(唐 不空訳)
- 57 〔ナシ〕55に同じ
- 58 〔同經〕同右
- 59 〔十一面經疏〕十一面神呪心經義疏(唐 慧沼撰)
- 60 〔ナシ〕同右
- 61 〔已上十一面經〕同右
- 62 〔同〕同右(後ろ三行空き)
- 63 〔決定毘尼經〕仏説決定毘尼經か。順序異なる。
- 64 〔大乘莊嚴寶王經〕仏説大乘莊嚴寶王經
- 65 〔同〕同右、要約か。
- 66 〔宝積經〕大宝積經
- 67 〔ナシ〕象腋經(劉宋 曇摩蜜多訳)
- 68 〔象腋經〕同右(後ろ一五行空き)

(2) 観音篇経文類聚部

観音篇の経文引用は、六八件ある。その典拠を一覧を【観音篇経文類聚部出典一覧】に示した。

最初に、『大乘莊嚴宝王経』『請観音経』『観音三昧経』などの文を数件ずつ引用し、その後、不空罽索観音、如意輪観音、千手千眼観音の順に、各変化観音に関する経文を載せている。46〜49とその周辺には、天台經典の引用が纏まって見られ、十一面観音は51〜62にある。63〜65は經典の意を要約した文で、単に本文から抜き出して縮めた文ではない。67、68は『象腋経』の引用であるが、観音のみに関わる要文ではない。前半の引用が注記された典拠に齟齬のない引用であるのに対して、後半が経文に一致しづらいのは、文殊篇と似た現象である。別の書に引用されたものから孫引きした可能性などが考えられるが不明である。しかし、それらが特に後半部分に集中していることは、要文集成の作業過程を反映しているようで興味深い。

以下、留意すべき箇所を順に確認していきたい。

1〜4には『大乘莊嚴宝王経』が引用されている。同経は35〜37と64〜65にも利用されているが、北宋・天息災訳の比較的新しい観音經典である。観音の六字大明陀羅尼の功德が説かれ、『覚禅抄』などの密教書で重視されている。<sup>6)</sup> 35の引用箇所には、「観音六字明呪也」と注記がある。

5「衆生有苦。三称我名。不往救者。不取正覚。〈文 弘猛海慧経〉<sup>7)</sup>」

『弘猛海慧経』は『観世音十大願経』とも呼ばれるが現存しない。この箇所は、『法華義疏』卷十二(『大正蔵』三四、六二八頁下段)、『往生要集』(『大正蔵』八四、四四頁中段)に「弘猛海慧経」として引用されている。

8 「光明甚盛照十方。摧滅三界磨波旬。拔除苦惱觀世音。普現一切大神通。」〔文 觀音三昧經〕

9 「大勢菩薩觀世音。能度十方苦難人。我令稽首難思議。普現十方魔皆知。破滅魔宮碎殿時。是故稽首正法王。哀哉無量事難當。拔地獄苦生天堂。」〔文 同〕

10 「若有人能受持此經。當得五種果報。何等為五。一者離生死苦滅煩惱賊。二者常与十方諸仏同生一處。出則隨出滅則隨滅、生々之處、不離仏辺。三者弥勒出世之時。當為三会初首。四者不墮惡道地獄餓鬼畜生阿修羅中。五者生処常值淨妙国土。」〔等文 同〕

8～10の「觀音三昧經」は、六朝時代の中國撰述經典『觀世音三昧經』である。入藏録から除外されたため伝存本が少なく、希少な用例と言える。<sup>8)</sup>

続く11～17はすべて『不空羅索神變真言經』である。16末尾に「已上不空羅索經」とあり、続いて17末尾に「同」とあるのは、本書原本における追記の痕跡とも思われるが不明である。17の後は十分分の空きがあり、18から如意輪觀音である。

18 「如意輪六臂 瑜伽法面決 金剛智訣。①南無大悲三昧思惟手。難度衆生能度相。②南無大悲三昧摩尼手。願求衆生能滿相。③南無大悲三昧案山手。八風不動利他相。④南無大悲三昧蓮花手。能示衆生不染相。⑤南無大悲三昧念珠手。三途衆生離苦相。⑥南無大悲三昧金輪手。能轉法輪滅罪相。」

典拠は不明であるが、これに近いものが『覺禪抄』卷四十八（觀音部如意輪）に以下のようにある。

六手本誓。或抄云。③大悲三昧安禪手。八風不動利他相。⑤大悲三昧念珠手。三途衆生離苦相。⑥大悲三昧金

輪手。能転法輪成罪相 ④大悲三昧蓮花手。能示衆生不染相 ②大悲三昧如意手。願求衆生能滿相 ①大悲三昧思惟手。難度衆生能度相 (『大正藏』圖像四、四七六頁上)

但し、番号を付したように、六手の掲出順序や語句に異同がある。また、①思惟手の「難度衆生 能度相」の部分は、『宝物集』(『新日本古典文学大系』一七四頁)や『栄華物語』(『新編日本古典文学全集』四一二頁)にも「難度衆生 能度相見」という形で見られるが、典拠未詳とされている。

19 「又様 不空訳。第一手思惟。愍念有情故。第二持意宝。能滿一切願。第三持念珠。為度傍生故。左按光明山。成就無傾動。第二持蓮手。能淨諸非法。第三手持輪。能転無上輪。」

不空訳の『觀自在菩薩如意輪瑜伽』(『大正藏』二〇、二〇八頁下段)にほぼ同文で見られるが、傍線部「第三手持輪」は「第三掣輪手」とある。金剛智訳『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』は「第三手持輪」(『大正藏』二〇、二二三頁中段)で一致する。

以下、24まで如意輪觀音に関するものが続く。25、26は『觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經』の引用で、その末尾を一行空けて、27から34までは千手觀音に関するものとなる。

30 「面有三眼。一千臂。一々掌中各有一眼。正前面身有十二臂。〈等文 菩薩呪經上〉」

33 「此菩薩過去毘婆尸仏。以化降魔身。千眼各出一仏。以為賢劫千仏。千臂又各化出一輪王。為千代転輪王此菩薩降魔身現出世時。一切世界中衆生身中有罪者。皆滅入地獄者皆得出生人天中不墮三惡道。〈文 千臂千眼觀世音菩薩呪經品卷上〉」

智通訳『千臂千眼觀世音菩薩咒經』巻上に見られる文言である。仁平二年（一一五二年）書写西方寺（大和郡山市）藏本（旧大門寺一切経）や、永万二年（一一六六年）書写興聖寺（京都市上京区）藏本が現存する。30は、静然撰『行林抄』にも、「千臂経上云」として同文が引用されている。また、西方寺本には、33と同じ「千臂千眼觀世音菩薩咒經品卷上」という「品」を含む内題・外題が付されている。これに対し、『大正新修大藏經』所収本（刊本一切経本）は、経題を『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神咒經』とする。30については「面有三眼一千臂。一一掌中各有一眼。綵色中不得著膠」（『大正藏』二〇、八七頁中段）であり、「正前面身有十二臂」の部分がな。また、33も「又案梵本。菩薩過去毘婆尸仏。亦現作降伏魔身。千眼中各出一仏。以為賢劫千仏也。千臂各各化出一転輪聖王。此菩薩降魔身中最为第一。」（『大正藏』二〇、八七頁中段）と、短いものである。

つまり、30、33は、「千眼千臂」の刊本一切経ではなく、「千臂千眼」の日本古写経本系統の引用である。この経典の本文については、落合俊典氏が、日本古写経（興聖寺本、西方寺本）に注目し、奈良写経の記録である『正倉院文書』に「千臂千眼」「千眼千臂」の両方の流通が確認できることと、開元一八年（七三〇年）の智昇『開元録』の入藏録には「千臂千眼」のみであることを示され、唐代初期の智通訳が、開元録編纂時までに改作されたと論じている。<sup>9)</sup> 30、33も希少な本文を伝承した例と言えるだろう。

39 「作是觀者不遇諸禍。淨除業障。除却無數劫生死也。如是菩薩。但聞其名獲無量福。何況諦觀。へ文 觀無量寿経」

引用は注記通り『觀無量寿経』であるが、これも版本系の本文ではない。金剛寺藏長寛三年（一一六五年）写本

には、「作是觀者不遇諸禍。淨除業障。除却無數劫生死之罪。如是菩薩。但聞其名獲無量福。何況諦觀」とある。<sup>⑩</sup>  
「除却無數劫」は、金剛寺本のほか中尊寺経や敦煌写経に見られるが、大正蔵本や浄土教版本は、「除無數劫」であり、本書は古写経系本文からの引用である。なお、「之罪」を「也」とする『觀無量寿経』は伝存しない。また、「如是」とする『觀無量寿経』は、管見の範囲では金剛寺本のみであり、他本は「如此」である。

44 「若有衆生受苦。称我名者念我名者。為我天耳天眼所見聞。不得免苦不取正覺。」  
〔文 悲花経〕

典拠注記には「悲花経」とあるが、『悲華経』にはなく、智顛『法華文句』（「悲花云」『大正蔵』三四、二三頁上段）に一致する。孫引きであろう。

45 「本体觀世音 常在補陀落山 為度衆生故 示現大明神」  
〔文 觀音三昧経〕

『觀世音三昧経』は、8、9、10にも引用されているが、45の句は同経には見られない。この句の初出は、大江匡房『本朝神仙伝』で稻荷大明神の本地を説くために記されたものであるが、後代、本地垂迹思想を示す際にしばしば用いられる。<sup>⑪</sup> その出典を「觀音三昧経」とする引用は、他には見当たらない。44妙法蓮華経文句、46妙法蓮華経玄賛、47法華文句記、48法華玄義釈籤、49摩訶止観と、天台經典が続くことから考えると、45も天台にかかわる資料からの引用であろうか。

50で『請觀音経』の四行偈を述べた後、二行空けて十一面觀音に関わる要文が62まであり、三行空き、以下は長文の意を取って要約したと思われる文が記されている。

63 ①一心三昧。現声聞形。②清淨不二三昧。辟支仏形。③寂靜三昧。現仏身。④晃耀三昧。現帝尺身。梵王身。⑤

妙勝三昧。現轉輪王身。⑥大莊嚴三昧。現居士身。⑦大悲三昧。入地獄畜生諸余惡道。〈文 決定毘尼經〉

西晋・敦煌三藏訳『仏説決定毘尼經』の該当箇所は以下の通りであるが、順序は一致しない。

⑦菩薩若入大悲三昧。能示現入地獄畜生諸余惡道。⑥菩薩若入大莊嚴三昧。現居士身成就衆生。⑤菩薩若入妙勝三昧。能現轉輪王身成就衆生。④菩薩若入晃曜三昧。能現積梵上妙色身成就衆生。①菩薩若入一心三昧。現声聞形成就衆生。②菩薩若入清淨不二三昧。現辟支仏形成就衆生。③菩薩若入寂靜三昧。能示仏身成就衆生。〔大正藏〕一二、三九頁中段)

64 「観音眼出日月。額出大自在天。肩出梵天帝尺。心出那羅延天。牙出大辯天。口出風天。腹出水天。〈大乘莊嚴宝王經〉」

該当箇所は『大乘莊嚴宝王經』卷一の以下の部分の抄出である。

観自在菩薩。於其眼中而出日月。額中出大自在天。肩出梵王天。心出那羅延天。牙出大辯才天。口出風天。臍出地天。腹出水天。〔大正藏〕二〇、四九頁下段)

65 「金色毛中有一切彦達波。黑色毛有一切仙人。灑甘露毛〈有六千金銀山高各六万由旬〉有一切天人。金剛面毛有一切豎那羅。光明毛孔〈有一万六千金山〉有一切菩薩。帝尺王毛孔〈有八万金山〉有一切不退菩薩。大葉毛孔〈有九万九千山〉有一切菩薩。續画王毛孔〈有百千万山〉有一切緣覺。〈同〉」

観音の毛孔の功德は『大乘莊嚴宝王經』卷三、卷四に詳細に記されているが、長文からの要約で異なる部分も多い。例えば、傍線部の「灑甘露毛」に関する記述は、卷三に、以下のようにある。

善男子彼菩薩身。而有毛孔名灑甘露。於是毛孔之中。有無數百千万俱胝那庾多天。止住其中。有証初地二地。乃至有証十地菩薩摩訶薩位者。除蓋障彼灑甘露毛孔之中。而有六十金銀宝山。其一山高六万踰繕那。有九万九千峯。以天妙金宝周遍莊嚴。一生補処菩薩於彼而住。『大正藏』二〇、五七頁下段

引用と原文のずれの理由は、別書からの孫引きも考えられるが、64、65の『大乘莊嚴宝王經』は三度目の引用であり、本書の編纂時により多くの関連本文を収録しようと意欲的に取り組んだことを示しているのかもしれない。

## 五、結

以上、〈佚名諸菩薩感応抄〉の構成と要文の典拠を検討したが、本書には、以前から注目されてきた『観世音庇験記』『善家秘記』などの佚文の他に、『千臂千眼観世音菩薩呪経』『観無量寿経』などの、版本系本文とは異なった古写経本文との一致が指摘できる。

経文類聚部に集成された要文は、整然と並んでいるようにも見えるが、収集後に並べ替えをしたと言えるほどではなく、収集作業の跡を多く残していると思われる。後ろの方ほど出典注記との齟齬が大きくなるが、それはより多くの要文を求めた結果と思われる。各部分の末に多くの余白を残しているのは、要文をさらに収録するためと考えられる。

引用された要文は、自らが菩薩行の厳しい実践に向かうものよりは、信仰対象としての菩薩の靈験にかかわるも

のが多い。観音部で言えば、面、手、眼などの菩薩の像容が具体的に示され、陀羅尼の功德が説かれているという点である。菩薩の感應譚とともに収録された要文であれば菩薩行よりも尊像の形や陀羅尼の功德が重視されるのは当然とも言えるが、感應部に用いられている『三宝感應要略録』や『広清涼伝』に見られる偈頌を経文類聚部に収録している点なども併せて、経文類聚部と感應部とが互いに響き合うものであることが分かる。本書には、六朝時代の『観世音心験記』や『観世音三昧経』ばかりでなく、遼の非濁撰『三宝感應要略録』や遼で重視されていた北宋の密教經典『大乘莊嚴宝王経』も積極的に用いられている。平安時代後期の菩薩信仰を伝える点からも更なる検討が必要である。本稿では主に各菩薩に関する経文類聚を扱ったが、冒頭の総論部分についても検討を進めたい。

## 〔註〕

- (1) 後藤昭雄「仲文章・注好撰」〔説話の講座四 説話集の世界Ⅰ―古代―〕勉誠社、一九九二年)、同「金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉」〔説話文学研究〕二八、一九九三年六月)、同「金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉考―所引の『日本靈異記』と『観音三昧経』について」〔国語と国文学〕七一―八、一九九四年八月)、同「三善清行『善家秘記』の新出佚文」〔同「本朝漢詩文資料論』勉誠出版、二〇〇二年(初出一九九五年)、同「金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉所引『観世音心験記』佚文」〔大阪大学文学部紀要〕三九、一九九九年三月)
- (2) 第二括弧第七括弧は、すべて八枚の料紙を二つ折りにした形である。第一括弧も同様とすれば、一三、一四丁の対となるべき冒頭二丁の欠落が考えられる。序文などが相当するか。
- (3) 標題「菩薩」は、その下部と次行が破損しており、文字のあった可能性がある。
- (4) 同じ經典の語句が連続して引用される場合も引用末尾に「文」とあれば、別の引用として数えた。以下も同様である。
- (5) 19は、「普賢菩薩一々毛孔。常出諸仏世界及諸菩薩。遍滿十方以化衆無的住処〔文 智論〕とある。

(6) 『大乘莊嚴宝王経』を重視する姿勢は、時代や思想を示すものと思われるが、今は検討する準備がない。上川通夫氏は「東密六字経法の成立」(同『日本中世仏教史料論』、吉川弘文館、二〇〇八年)において北宋や遼の密教経典と六字経法の関係を検討され、真言宗では成尋が版本を請求した一〇七三年以後に同経に改めて注目したかと論じている。また、本経が遼で重視されていたことについても言及している。

(7) 〈 〉は小字や割書を示す。本稿では、注記であることを示すために、あえて〈 〉を付した部分もある。

(8) 『観音三昧経』については、牧田諦亮『疑経研究』(京都大学人文科学研究所、一九七六年)、牧田諦亮・落合俊典『七寺古逸経典研究叢書二 中国撰述経典(其之二)』(大東出版社、一九九六年)、注(1) 前掲の後藤昭雄論文(一九九四年)参照。平安後期書写の京都国立博物館所蔵本(守屋本)と七寺所蔵本以外は、残欠のみの伝存である。

(9) 落合俊典『疑経をめぐる問題―経典の物語化と改作』(『シリーズ大乘仏教十 大乘仏教の東アジア』(二〇一三年、春秋社)。なお、西方寺本・興聖寺本については、落合氏により国際仏教学大学院大学日本古写経研究所にて影印を見せていただいた。

(10) 『観無量寿経』の本文異同については、日本古写経善本叢刊 第三輯『金剛寺蔵 観無量寿経 無量寿経優婆提舎願生偈註 卷下』(国際仏教学大学院大学 学術フロンティア実行委員会、二〇〇八年)所収の拙稿「金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』諸本校異」、『観無量寿経』の本文―「称南無無量寿仏」を含む伝本をめぐって―」参照。

(11) 今堀太逸「大明神」号の成立と展開」(『神祇信仰の展開と仏教』一九九〇年、吉川弘文館)など参照。

#### 付記

\* 〈佚名諸菩薩感応抄〉を含む金剛寺聖教・一切経の調査については、天野山金剛寺堀智真座主に多大なご高配を賜った。

\* 本稿は、「仏教与文学 日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術研討会」(中国人民大学、二〇一四年)における口頭発表

表「金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉の編纂方法―観世音篇の経文類型に着目して―」を踏まえて成稿したものである。ご教示を賜った先生方に感謝申し上げます。

\* 本研究は、JSPS科研費JP15H0318、JP23720124の助成を受けたものである。